

2023(令和5)年度埼玉県・オハイオ州スカラシップ
〈語学・大学留学コース〉最終レポート
“これから”

2023(令和5)年度奨学生 河原塚 咲

みなさま、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか。

渡米するまでは長いと感じていた留学生活も、本当にあっという間に終わってしまいました。こうして最後のレポートを書きながら、フィンドレーで出会った人たちとの思い出が次々と浮かんでいきます。悲しさや恋しさと共に、また新たな目標を見据えて生活していこうと決意を新たにしているところです。

今回のレポートでは、帰国に向けての準備やジョブシャドウイング・表敬訪問、そして留学の総括について書きたいと思います。

CONTENTS

1. 帰国の準備について
2. コロンバスでジョブシャドウイング・表敬訪問
3. 1年のまとめ

1. 帰国の準備について

期末試験が4月最終週にあり、それが終わり次第現地の学生たちは各々家族のもとへと帰っていきました。私物を全て撤去しなければならないため、多くの学生は家族が手伝いに来ていました。私を含め日本からの留学生の多くは大学に申請を出し、数日長くキャンパスに滞在していました。学期の終了が近づくにつれ、学内では衣類の寄付を呼びかけるイベントがいくつか行われており、私も利用しました。

私は、こちらに来てからギターを購入し日本へ持って帰ろうと思っていたため、スーツケースの1つを先に日本へ送ることにしました。フィンドレーから車で2時間弱のコロンバスにクロネコヤマトがあり、そこで手続きをしました。ただ、できれば荷物を送らずに自力で持って帰ったほうが良いと感じています。理由は2つあり、費用が高いことと手続きがやや煩雑であるためです。パスポート等必要書類のアップロード、日本の空港に着いてからもやらなければならないことがあります。なるべく宅配便は使わないことを個人的にはおすすめします。(ちなみに、帰国してちょうど1週間後にスーツケースは自宅に届きました)

2. コロンバスでジョブシャドウイング・表敬訪問

学期終了後の5/6~5/8の3日間、コロンバスにあるJobsOhio、オハイオ州教育局、開発局にてジョブシャドウイングと表敬訪問の機会をいただきました。

JobsOhioでは、Ben Park氏に8月からの留学の成果についてプレゼンテーションを行いました。JobsOhioは、州全体の経済発展を促進するべく、様々な企業をオハイオ州へ誘致しています。韓国にもルーツを持つPark氏のひとつの枠にとらわれない経歴を知ることができ、いろいろな人と出会って視野を広げ

続けること、という力強い言葉もいただいて、たいへん有意義な時間になりました。

次に伺ったのは教育局です。Wertz 氏は高校時代にスペイン語、それ以降にはドイツ語、フランス語、フィリピンにて勤務していた際にはタガログ語など、様々な言語に接したことがある方です。フィンドレー大学のスペイン語のクラスでは、高校時代にスペイン語を履修していたという学生が多かったのですが、アメリカでは外国語教育というのはあまり広く行われているものではないそうです。こうしたなか教育局では、世界各地からの外国語教員の誘致をはじめとした活動を行っています。特に印象的だったのは Wertz 氏が「オハイオ州において日本語を学ぶことは、他の言語を学ぶよりも重要である」とおっしゃったことです。オハイオ州は Honda 社など、日系企業の進出が多い地域です。コロンバス近郊にある Dublin も、Honda 社関連の企業が多数あることから、日本人の人口が多い地域です。こうした地域を皮切りに、日本語教育をもっと活発に行っていきたいとおっしゃっていましたが、金銭的な援助が受けられなければ難しいとのことでした。

3 日間を通してジョブシャドウイングを行ったのが、開発局です。限られた時間の中で、近くにあるオハイオ州立大学の学校案内やインタビューの機会、オハイオ州回議事堂の見学、開発局がどのような活動をしているかについて各部署のメンバーから話を聞くなど、たいへん密度の濃い時間を過ごすことができました。特に、開発局にて行っているインターンシッププログラムについてのお話が印象に残っています。このプログラムではオハイオ州内にある大学から学生を募り、企業と学生をマッチングします。参加する学生はリアルな市場取引の場を体験することができます。私が開発局で出会った方々は、長期休みを利用してインターンシップに参加しているようで、とある学生はまだ大学2年生だということで驚きました。彼女は8月までのインターンだということでしたが、できれば期間を延長し、将来的には開発局の職を得たいと話していました。私はまだ、日本でインターンシップや企業見学をするといった経験はありませんが、今後の自身のキャリアを考える参考になったと感じています。また、財政に関する業務を行う部署についてお話を聞いた際には、配布されたグラフにあった Higher Education の分野について質問をしました。これは主に奨学金制度で使われるお金だということでした。私自身、奨学金制度を利用して留学に来ることができたため、こうした学びの機会を増やすことのできる奨学金などの制度がもっと増えるとよいと思う、と自分の考えを担当者の方にお伝えしました。

3日間を通して、英語を使ってプレゼンテーションをし、普段は行くことのできない企業へ表敬訪問やジョブシャドウイングをするという貴重な経験をすることができました。まさに変化の最前線で舵取りをし、生き生きと仕事をする人たちの姿は、帰国してからも学び続けるためのよいモチベーションになりました。



JobsOhioにて Ben Park 氏に
留学の成果について発表しました



開発局の Director である Mihalik 氏
(左から 2 番目)にプレゼンテーションをした際の 1 枚です

3. 1年のまとめ

この留学を通して私が学んだことを2つ共有したいと思います。

・自己主張について

できること、やってみたいことを発信してみることです。なぜならこちらの人はどんな出来であっても、必ず褒めてくれるからです。そこには「やってみたことに意味がある」という考えが透けて見えるような気がします。例えばギター演奏が練習の通りにいかなかったり、スペイン語での表現がうまくできなかったりしても、いいところを見つけて褒めてくれるのです。

こうした人々に囲まれて、留学前多くの場合において本番や結果が大事だと考えていた私も、いろいろな体験を経た今は、本番や結果に至るまでの過程も楽しめるようになりました。

・相手に興味を持つということ

適切な単語が分からない、文法的に間違っているかもしれないと思っても、とにかく自分の意見や思いを口に出してあげることが大切だと感じました。私も最後まで難しさを感じましたが、これを実践したことで得た素敵な出会いをひとつ、紹介します。アメリカを発つ日、私ははじめて Uber(タクシー)を利用しました。なんとか乗車し、運転手さんに「お家は近くなのですか？」と話しかけてみました。彼は「車で5分くらい」と答えてくれました。そこから、彼の生い立ちや休みの日にしていること、私の留学のこと、語学をどう勉強するのか・・・等々、とても楽しく会話をすることができました。彼は移民としてアメリカへやってきたこともあり、政治に関する興味深い意見も聞くことができました。ホテルから空港までの20分程度でしたが、写真も撮り連絡先も交換し、短時間でとても近くなれました。自分の英語力の伸びを少し実感すると同時に、黙っているのではなくに行動に移してみるということが重要だと再認識しました。

加えて、埼玉県の代表としての留学を終え、今後の自分に何ができるのか、何をしていきたいかを考えた時、

3つやってみたいことがあります。

・この奨学金制度を広めていくこと

この留学制度は大学間での交換留学とは違い、公的な立場で各所の重役の方とお会いすることができ、埼玉県という場所をアピールできる貴重なものです。私自身、これからやりたいことに対する良いアピールポイントとなると考えています。今後、自身の留学について語る時には「姉妹都市」という他の留学制度との違いが伝わるようにし、積極的に発信しながらこの奨学金についてもっと知ってもらえるように努力したいと思います。

・日本語を学ぶ海外からの人たちをサポートすること

とある昼休みに、友人と「もし日本の首相になったら何をしたいか」を話し合ったことがありました。彼は私と同じようにおよそ1年間日本へ留学しており、日本語での会話も十分できると思われましたが「外国人が日本で生活するのは難しい」と言います。彼をはじめ、留学に来てからたくさんの人たちに親切にしてもらった経験から、私も日本で暮らす(暮らしたい)人たちをサポートしたいと思うようになりました。首相になる予定は今のところありませんが、以前さいたま市が行う日本語を教えるボランティア講座に参加した経験があり、身近なところから始めていけたらと思っています。

・自身の専門性を高めること

最後に、専門性を高めるということです。フィンドレー大学は、Pre-vet と呼ばれる Veterinarian(獣医師)の養成においてアメリカの中で有名な大学ですが、授業についていくことは非常に大変らしく、専攻を変える学生も少なくないそうです(ただし、アメリカの大学においては専攻を変えることは日本よりも珍しいことではありません)。私のハウスメイトも Pre-vet を専攻しており、学内の活動とも並行しながら毎日授業の合間、夜遅くまで一生懸命勉強をしていました。加えて身体に不自由を持つ人たちが、フィンドレー大学の学生ボランティアと共に、楽しそうにプレーする野球の試合を観に行ったことが「誰にとっても暮らしやすい場所とはなんだろう」と考えるきっかけになりました。この奨学金がくれた出会いや体験から、学問に対するモチベーションが上がり、自身の専攻のなかで「まちづくり」という分野をもっと学びたいと思うようになりました。将来的には、大学院進学も視野に入れて学び続けたいと考えています。

最後になりましたが、応援してくれた家族や友人、背中で人生を楽しむことを教えてくれるフィンドレー大学の川村先生、慣れない土地で謙虚に生きることを体現する青木先生をはじめ、埼玉県国際課の方々、過去の奨学生のお二人、ジョブシャドウイングで出会うことのできた開発局の方々、ギターを楽しさを教えてくれた Mr. Parnell や在籍大学からエールをくれた仲谷先生や金子さん…そして、フィンドレーやこの留学を通して出会えたすべての人たちにありがとうと伝えたいです。多くの人たちの支えがあったからこそ、毎日学ぶ喜びに満ちていました。こうして出会えたご縁を今後も大切にしていきます。

オハイオ州と埼玉県の友好関係が形となったこの奨学金によって、これからもたくさんの人たちが自分のやりたいことに自由に挑戦できることを願っています。



フィンドレー大学で出会い
2学期間共に学んだ日本人留学生のみんなと



フィンドレー大学のラジオスタジオに描いた
イラストとサイン

*最後までご覧いただきありがとうございました！引き続き本プログラムに関する質問や
報告書の感想を受け付けたいと思います。お気軽にご連絡ください！

kawaharazukas@findlay.edu